



2023年6月  
第738号

日本基督教団 平塚教会  
発行人 平塚教会  
編集人 中山洋司  
〒254-0045 平塚市見附町6-18  
電話 〇四六三(32)八八三一



# CS生徒を愛していますか

平塚教会牧師 北川一明

私たちは、自分が死から命へと移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛することのない者は死に留まったままです。

(ヨハネⅠ三・14)

キリスト教系の大学に通っていたころ、私は「信じることができさえすれば伝道者になるのに」と思っていました。キリスト教を信じて生きるのは善いこと、幸せなことと分かっていたので、人に知らせたかったです。牧師になるための障碍はただ一つ、自分は信じていないという一点でした。後に信じたので、すぐに神学校に行きました。

神学校で、少し伝道の意欲がそがれました。ひとつは「行って全ての民を私の弟子にしろ」というマタイ福音書(二八・18〜20)や「御言葉を直ぐ伝えなさい。折が良くて悪くても」という牧会書簡の言葉(テモテⅡ

四・2)を持ち出されたからです。「命令されてやるのはいやだ」と感じました。

もうひとつ、教会の伝道する動機に不純なものを感じたこともありました。「仲間の数を増やす」とか「神さまに評価してもらえる」など、自分の利得のために伝道しようとしているようだったのです。自己のために人を宗教に引き込むのなら、怪しい新興宗教と同じです。なぜ伝道するかと聞かれたら、冒頭の聖句を挙げた方が良いでしょう。

自己都合の伝道でも、戦後の昔であれば相手の幸せに貢献しました。前世紀、キリスト教は戦勝国の進歩的な宗教でした。「日本人を全体主義から解放して、民主主義の自由を与えてくれる」と思われていました。当時キリスト教の教理を教えられた人たちは、その善いものが自分をどう幸せにするかを自分で考えました。ですから教会は教理を教えていれば良かったのです。簡単でした。

しかし今教理を教えると相手は自分とは関係ない宗教の話と受け取ります。無理矢理に聞かせると迷惑です。近寄ってくれなくなりません。

## 目次

CS生徒を愛していますか

牧師 北川一明 …1

親子礼拝のお話

「見よ、それは極めて良かった」

庄司幸夫 …3

信仰50周年を迎えて①

信仰50年に八戸を訪ね

阿間牧子 …4

編集後祈

…4

私がキリスト教学校に勤めた十年間は、東京教区「教務教師」の立場で特定の教会がありません。我が家の子もただだけが特定の教会に所属していません。

部活動のある日曜日には礼拝を無理強いにしませんでした。代わりに早起きして、牧師の資格を持つ者の司式・説教による「主日礼拝」のいわば海賊版をやりました。自分の子どもたちに向かって「私製礼拝説教」をしました。子どもたちには「神を畏れ敬う」ということは伝わっていたようで、普段は反抗して口答えする子どもたちも真面目に聞いてくれました。

物凄く豊かな体験でした。思春期の子どもが、親の説教を黙って真面目に聞くのです！こんな有り難いことがあるでしょうか。

それだけに、子どもに「自分には関係ない」と思われる話できません。相手が生涯を通して幸せになるための基礎となる話を、思春期の子に受け入れられる仕方です。話さなければならぬと苦労しました。「ダビデはゴリアテに石をぶつけて殺した」「ダニエルはライオンに喰われなかった」「善きサマリア人は怪我人を助けた」、そんな聖書箇所は慎重にならざるを得ま

せん。ただの「聖書物語」として話すのは簡単ですが、「私とあなたがたの物語」として話さないと「自分には関係ない」になってしまいます。

キリスト教学校は「学校」だからでしょうか。キリスト教をやたらと「教え」とします。でも《信仰》を教えるのは困難です。そこで多くの場合、キリスト教の教理や知識、聖書物語、命・人権・平和・自然保護の大切さ、キリスト教芸術・文化：などが教えられます。多くの場合、教理や知識は「自分とは無関係の宗教」、聖書物語は「馬鹿馬鹿しいお伽ばなし」、人権・平和：は「タテマエのきれいごと」、キリスト教芸術・文化は「他人の趣味」ととられるのが現実です。

「ダビデとゴリアテ」「ダニエルとライオン」「善きサマリア人」「バツハとブクステフーデ」「コルベ神父」「体育の先生だった星野富弘さん」「奴隸船の船長によるアメイジング・グレース」「信仰詩『フットプリント(足跡)』」などは、よく出来た話です。話すのは容易です。ただ話だけでは自分の子どもは席を立ちたくてそわそわしたでしょう。我が子に相手にされな

い無駄話をお預かりしている余所様のお子さんがたに無理矢理聞かせてはいけません。

それらの話が自分を幸せにするために決定的に重要だったならば、親は子に、先生は生徒に、なぜ幸せに影響したかを伝えます。教師がそこまで自分をさらけ出した時には、中学生でも高校生でも静まりかえって聞き入ります。

信仰については「教える」というよりも「証しする」といわれます。キリスト教についてを教えるのではなく、信仰で幸せなっている自分のことを教えるからです。

相手が自分のように幸せになることを願って語ると、自分の幸せに改めて気付きます。さらに、相手の幸せのために語るのですから、語るがそのまま愛することになっていきます。語ることで幸せと愛が増え、自分が「死から命へと移ったこと」が分かります。

：というわけで、みなさん教会学校の働きにご協力ください。よく出来た物語を上手に語るなど求めていません。生徒たちの前で、ご自身の幸せを紹介していただきたいだけです。

## 親子礼拝のお話

# 「見よ、それは極めて良かった」

庄司 幸夫

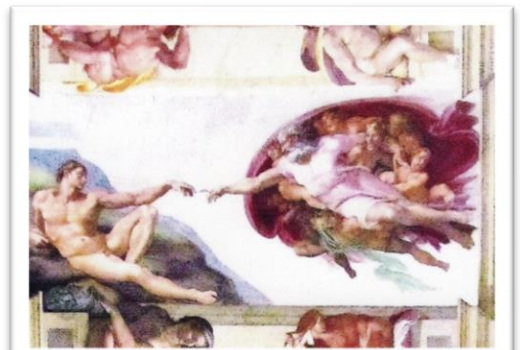
4月の親子礼拝のテーマから「神は人を愛している」「人は神の似姿である」を、話したので紹介させていただきます。「創世記」を著わしたモーセたち、イスラエルの人々は祖国を滅ぼされ、虐待を受け、苦しみの中にありました。そんな中でモーセは神さまを信じる信仰を持って、人々の「救い」と「希望」を記したと云われています。

神さまが、何も無いところから、昼と夜、空と海と陸、太陽と月を造り、空と海と陸には生き物をお造りになり、これらの生き物を支配するために人を造られました。そして全てが完成し、極めて良かったと祝福されました。

システイーナ礼拝堂の天井画として、ミケランジェロが描いた「天地創造」の中央には、横たわるアダムに神が息を吹き込むようにして、一生懸命に手を差し延べ、アダムの指に触れようとしています。この絵は、私たちと神様の関係を見事に表わしてい

るのではないでしょうか。また「神は御自分にかたどって人を創造された」とあります。これらから、人は誰もが尊く、かけがえない大切な者として、神さまから「命」を授かり、アダムだけでなく、今も私たちがみんなに、聖霊により呼びかけていることが解ります。

「神はお造りになった全てのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」とあります。これは、「神さまが満足するほど素晴らしい世界」をみんなに知って欲しい。そして「いつまでも引継いでいこう」と呼びかけているのではないのでしょうか。28節では「生き物を全て支配せよ」と書かれています。が、「お造りになった全てのものが満足できるほど良かった」と云っているのです。生き物だけではなく、神さまが造った全てを「神さまが造った時のような良い状態」で守っていくようにと云っているのです。



人類がこの地球上で暮らし続けていくために、2030年までに達成すべき目標



今から三千年以上前のことですが、最近世界中で云われている「SDGs」ソックリですね。「SDGs」は、人々がこれからもずっとこの地球上で暮らし続けていくために、私たちは何をしなければならぬかを解りやすく具体的に17の目標にまとめ、国連で決めたものです。これらのことは、私たちが、そしてその子どもたち、またその子どもたちが、幸せに暮らしていくために大切なことです。

今日は、創世記の第一章から、今の時代に対する警鐘を考えてみました。皆さんも昔の神話じゃないかと素通りせずに、今の自分に何を言っているのだらうと考えて見てください。

※子どもたちには、鳴門にある「大塚国際美術館」では、本物そのままの「天上画」が見られることも紹介しています



## 信仰50年を迎えて①

阿閉牧子姉・庄司壽美姉・谷口美佐子姉が信仰生活50年を迎えました。洗礼をお受けになった「50」年は、オイルショックによる物価の急上昇、ノストラダムスの大予言が出版された年でもありました。そして「せまい日本 そんなに急いでどこへ行く」の標語が流行した年でもありました。

## 受洗50年に八戸を訪ねて

阿閉牧子

私は50年前、イースターの日に千葉県松戸教会で石井錦一牧師により洗礼を受けました。

昨春秋に亡くなった夫の励ましと協力無しでは信仰生活は途中で挫折していたかもしれませぬ。夫に感謝する日々です。夫の死を悲しむ私に娘が「八戸に旅行しましょう」と提案してきました。私が6歳から三年半過ぎた土地です。戦時中両親が経験した空襲のことで繋がりの出来た八

戸小中野教会にお手紙を出しました。「ぜひどうぞ」のご返事をいただき、4月19日を八戸訪問と決め、娘は盛岡にホテル、新幹線の手配をしてくれました。18日盛岡に留まり、19日小中野教会に向かいました。小中野教会は亡母が慣れない風土の生活の中で心の寄所として時々おじやましていた教会です。母は讚美歌「むくいをのぞまで」を子守歌代りに夜、歌ってくれました。

水曜日小中野教会で祈禱会の終わる時間におじやましました。小林先生と役員（上條さん・中坂さん）の方に迎えられました。まずは海辺のおいしい海鮮料理の店でお昼をいただき、私がお願いしていた「イメルダ幼稚園」に3時の約束をしていただきました。お忙しい小林先生とお別れして役員さんの案内であきらめていた美しい緑の芝生の種差海岸を見ることができました。3・11では津波に襲われたところでは。今は回復して海岸から八甲田、六ヶ所、下北半島が見えます。両親と共に家族で何度も訪れた懐かしい場所です。

3時にカトリック教会の隣の「イメルダ幼稚園」を訪問しました。上條さん、中坂さんも「私たちもイメルダの卒園生です」

とおっしゃって、同窓ですと楽しく幼稚園の先生とお話しました。私は卒園後、教会の裏にある修道院の中にできた小学校に入学しました。今は修道院だけで小学校はありません。戦後の混乱期にカナダのケベック州から派遣されたシスターたちから幼い私たちは神さまのことを教わりました。主の祈りを覚えたのも幼稚園でした。一生懸命に種をまかれていたのです。

八戸を離れて70年近くになります。再び訪れることはないと思っていました。私の信仰の原点を受洗50年の年に訪れることができたことを神さまに感謝します。同行してくれた娘に感謝し、そして信仰のつながりですと歓待して下さい、案内して下さい。八戸小中野教会の方々に神さまの祝福が多くあることを祈ります。天気にも恵まれ思いで深い忘れられない旅の一日となりました。

## 編集後祈

花壇が初夏の花に一新しました。街行く人にマスクなしの方の姿が見られるようになり、教会では平和を学ぶ会が再開されました。主に感謝。

(編集子)